チームアプローチで実現するゲノム医療と薬剤師の役割

青森 達,^{*,a} 望月 眞弓^{a,b}

Genomic Medicine from a Team Approach and the Role of Pharmacists

Tohru Aomori^{*,a} and Mayumi Mochizuki^{a,b}

^aKeio University Faculty of Pharmacy; 1-5-30 Shibakoen, Minato-ku, Tokyo 105-8512, Japan; and ^bDepartment of Pharmacy, Keio University Hospital; 35 Shinano-machi, Shinjuku-ku, Tokyo 160-8582, Japan.

2019年6月、がん遺伝子パネル検査が保険収載され、がんゲノム医療はいよいよ医療に実装される段階を迎えた。

がんゲノム医療は、患者に対するゲノム検査の説明に始まり、次世代シーケンサーを用いたゲノム解析、解析結果に基づく治療方針の決定、疾病の予後予測までを含めた患者への説明など多くのステップがあり、高度な知識・技術を集結させて初めて成り立つ。このような高度ながん治療を患者に提供するための拠点として、2018年2月に全国で11施設のがんゲノム医療中核拠点病院が指定され、がんゲノム医療の実践のみならず、連携病院に対する診療支援、治験や先進医療の主導、さらには人材育成などが行われるようになっている。

がんゲノム医療を実際に行うためには、主科となる医師のほかに、病理医、看護師、検査技師、生物統計家、遺伝カウンセラーなど、多くの分野の専門家が連携したチームアプローチが不可欠であり、そこにはもちろん薬物療法の専門家たる薬剤師も含まれる。チームのメンバー一人ひとりが、がんゲノム医療そのものと、その中での各職種の専門性を相互に理解することが求められる。また2018年7月には遺伝性乳がんに対するオラパリブの保険適応が承認され、薬剤師が服薬指導の際に患者の遺伝情報に触れることは十分に想定されようになった。服薬指導に家族が同席したり、本人不在で家族に薬を渡したりするようなケースも起こり得る。このような場

面に適切に対応するためには、遺伝情報の取り扱いや、患者・家族への対応方法を十分に知って準備しておく必要がある。がんゲノム医療が今後、急速に広がって行く中で、その方法論や生殖細胞系列変異の意味までを正確に理解し、チームでの活動や患者への服薬指導ができる薬剤師の養成は急務である。

本誌上シンポジウムでは、このようなゲノム医療の全体像、それに対するチームアプローチの中で薬剤師に期待される役割、またその役割を果たすために必要な資質について各分野の専門家6名にご執筆頂いた。まずはじめに、慶應義塾大学医学部腫瘍センターゲノム医療ユニット長の西原広史教授に「ゲノム医療に求められるシステム構築と人材について」と題して、現在のゲノム医療を概説して頂いた。次に、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の富田秀太准教授に、生物統計家としての役割、遺伝子変異解析の手法とその基礎的な知識を解説して頂いた。3題目は滋賀医科大学医学部附属病院薬剤部長の寺田智祐教授に、ゲノム医療の中で薬剤師が担うことのできる役割と必要な資質について、具体的に例を挙げながら解説して頂いた。次に慶應義塾大学医学部腫瘍センターゲノム医療ユニットの四十物絵里子特任助教からは、病理医として患者に治療の説明をする経験のなかから、薬剤師に対する期待を語って頂いた。また浜松医療センター薬剤科の宮本康敬副科長からは、がんゲノム医療連携病院としての体制の整備と、その中での薬剤師の役割を紹介して頂いた。最後に慶應義塾大学病院薬剤部の櫻井洋臣主任には、「日本医療研究開発機構 (Japan Agency for Medical Research and Development; AMED) ゲノム創薬基盤推進研究事業 A-3」において実施している、ゲノム医療薬剤師養成の取り組みと、その

^a慶應義塾大学薬学部 (〒105-8512 東京都港区芝公園1-5-30), ^b慶應義塾大学病院薬剤部 (〒160-8582 東京都新宿区信濃町35)

*e-mail: aomori-th@pha.keio.ac.jp

日本薬学会第139年会シンポジウム S49 序文

成果について紹介して頂いた。

本誌上シンポジウムが、これからがんゲノム医療

に本格的に参画する薬剤師の方々にとって、1つの指標となれば幸いである。